東北の被災地における冒険遊び場の運営形態と存続理由

文学部人文社会学科　教育学専攻　４年

平井　翔子

目次

序章　研究目的と展開 1

第１章　冒険遊び場の誕生 2

　第１節　ヨーロッパでの動き 2

　第２節　日本での動き 2

第２章　調査概要 3

　第１節　調査方法 3

　第２節　調査地 4

　第３節　仮説 5

第３章　調査結果 7

　第１節　「あそびーばー」 7

　第２節　「面瀬川ふれあい農園」 12

　第３節　考察 18

終章 19

序章　研究目的と展開

「遊び」は「おもしろそうだ」「たのしそうだ」という気持ちから生まれ、それが「やってみたい！」という心の動きに変わったときに、遊びが始まる。遊びを通して自ら育つという考えから「遊育」という言葉が使われているように、子どもは遊びながら、生きる力を体得していく。しかし、仙田（仙田満，2009）は、1960 年頃から、時代と共に遊び環境の悪化が量的変化と質的変化の二側面で進んでいると指摘している。

こうした中、子どもの自由度を高め、多様な体験を可能とすることを目指して、母親をはじめとする地域住民や行政によって 1970 年代中頃から、「自分の責任で自由に遊ぶ」をモットーに掲げた「冒険遊び場」づくりが展開されている。冒険遊び場は禁止事項がなく、子どもが遊びの空間を創造できる遊び場である。このような遊び場を実現するためにプレーリーダーと呼ばれる大人が配置されている。

子どもの成育環境への危惧により始まった冒険遊び場づくりであるが、阪神淡路大震災以降、「子どもの心をケアする」という新しい意義が見いだされた。以降緊急期の「子どもの心のケア」を目的に多くの被災地域で開かれるようになった。しかし、復旧復興期に突入すると支援団体の引き上げや需要がなくなったことを理由に活動を終えた場所が多い。

そこで本研究では、被災地の冒険遊び場の存続理由を明確にすることを目的とする。日本の冒険遊び場づくりの特徴は住民運営にあり、遊び場の維持は地域住民の関わる姿勢に左右されると考えられる。そのため本研究では遊び場の運営形態に着目して調査をすること、利用者へのヒアリング調査から遊び場の意義を調査することの２つの観点から調査し、目的を達成する。

本研究の章構成は以下の通り３章から成り立っている。まず「冒険遊び場の誕生」と題する第１章でヨーロッパで誕生した冒険遊び場づくりと日本での動きについて述べる。続いて第２章「調査概要」では、調査地と調査方法及び仮説を述べる。第３章「調査結果」は、気仙沼市内にある２つの冒険遊び場「あそびーばー」と「面瀬川ふれあい農園」で行った調査の結果と考察をまとめる。

また、文献や遊び場によって、同質の遊び場を指しながらも「冒険遊び場」「プレーパーク」「プレイパーク」といった表記の揺れが存在する。プレーリーダーも「プレイリーダー」「プレーリーダー」「プレイワーカー」と呼び名に統一性がない。そのため、本研究では固有名にあたる場合を除き、「冒険遊び場」、「プレーリーダー」として統一して記す。冒険遊び場とプレーリーダーの定義は特定非営利活動法人日本冒険遊び場づくり協会の定めるものに従う。

第１章　冒険遊び場の誕生

調査結果を論ずる前に、本章で「冒険遊び場」の誕生と発展について述べる。第１節では冒険遊び場の発祥地であるヨーロッパの動きについて述べる。第２節では日本国内の動きについて述べる。

第１節　ヨーロッパでの動き

冒険遊び場の創設者は、デンマークの造園家、ソーレンセン教授（C.T.Sorensen）である。1930 年代、ヨーロッパで都市化が進み、生活空間の中に子どもが自由に遊べる遊び場がなくなった。遊び環境の貧困化に危機感を抱いたソーレンセン教授は、1943 年にデンマークの首都コペンハーゲンに廃材遊び場の構想を生かした「エンドラップ廃材遊び場」をつくった。この遊び場こそ世界最初の冒険遊び場である。

冒険遊び場の発想を世界中に普及させたのはイギリスのアレン・オブ・ハートウッド卿夫人（以後、アレン卿夫人と略記する）である。第２次世界大戦後、エンドラップ廃材遊び場を訪れたアレン夫人は遊び場の理念に深く共感し、思想を自国のイギリスに持ち帰った。そして、“Planning For Play (『都市の遊び場』)”　（アレン・オブ・ハードウッド，1968[河相全次郎発行，大村虔一・大村璋子訳，1973]）を執筆したことで、冒険遊び場づくりがヨーロッパ中に隆盛した。

第２節　日本での動き

アレン卿夫人の著書が『都市の遊び場』に翻訳出版されたことで、日本でも冒険遊び場が注目されるようになった。1974 年、ヨーロッパに渡って冒険遊び場を視察した大村虔一・大村璋子（以降、大村夫妻と略記する）は、東京都世田谷区で保護者らと「遊ぼう会」を発足した。「遊ぼう会」は世田谷区から空き地を借用して、夏休みの期間限定で 1975・76 年に「経堂冒険遊び場」、1977 年に「桜丘冒険遊び場」を開設した。冒険遊び場の実績を認めた世田谷区は 1979 年に国際児童記念事業の一環として、区内の羽根木公園の一画に日本初の常設の冒険遊び場「羽根木プレーパーク」を開設した。

世田谷区での活動は次第に全国に広がり、2019 年 1 月現在、全国に 232 カ所の冒険遊び場が開設されている。

第２章　調査概要

本研究は、被災地域の冒険遊び場の存続理由を明確にすることを目的としている。本章では調査概要を記述する。第１節は調査方法、第２節は調査地について述べる。調査は２段階に分けて実施している（以後、第１段階、第２段階と略記する）。第３節は調査に向けて立てた仮説を述べる。

第１節　調査方法

調査は 2018 年７月から 12 月にかけて２段階に分けて行った。（１）で第１段階、（２）で第２段階の調査方法をまとめる。

（１）第１段階

第１段階では被災地域での冒険遊び場づくりの実状を把握するために、前段階として日本の冒険遊び場づくりの関係者へ調査を行い、調査結果をもとに第２段階に向けて仮説を立てた。調査の概要は表１の通りである。被災地における冒険遊び場づくりの全容を把握するために、阪神淡路大震災の被災地で冒険遊び場づくりを経験した方と東日本大震災前後の東北の冒険遊び場づくりに関わっていた方の５名にヒアリング調査を行った。質問項目と関係者のプロフィールは別紙に添付する。

表１　第１段階調査概要

手段	ヒアリング調査、電話、SNS
時期	2018年７月～12月
実施場所	気仙沼市、仙台市、世田谷区
協力者	天野秀昭、根本暁生、須永力、神林俊一、廣川和紀、遠藤みゆ
記録方法	レコーダー、メモ
時間	一人２時間前後
形式	前に筆者から共通の質問項目を送り、ヒアリング当日に質問内容に答えてもらい、最後に任意で協力者からコメントを頂く

（２）第２段階

第２段階では「あそびーばー」と「面瀬川ふれあい農園」の運営主体に運営形態を確認した。同時進行で遊び場の利用者にもヒアリング調査を行い、遊び場の役割を明らかにした。そ

して、気仙沼市の冒険遊び場の位置付けを確認するために気仙沼市議会議員と気仙沼市役所職員に調査した。

運営形態の調査は、「あそびーばー」は「気仙沼あそびーばーの会」の会長・鈴木美和子とプレーリーダーの千葉開生に話を伺った。時間は２名で３時間前後、場所は「あそびーばー」で行った。形式は遊び場の設立経緯と運営形態を伺った後、遊び場の課題について伺った。そして仮説検証に不足している情報を質問した。ヒアリング内容はレコーダーとメモで記録した。また、送迎していただいた車内や SNS でも質問しており、このときはメモを取った。

「面瀬川ふれあい農園」は、「面瀬川ふれあい農園運営委員会」副運営会長・熊谷涼美枝に話を伺った。時間は２時間前後、場所は面瀬公民館で行った。形式は「あそびーばー」と同様で遊び場の設立経緯と運営形態を一通り話していただいた後に質問を行っている。ヒアリング内容はレコーダーで記録した。

利用者の意識調査は、両遊び場とも調査期間中に遊び場を訪問し調査した。形式は、芋煮会やハロウィンなどのイベントに交じり、雑談の中で評価を尋ねた。ヒアリング内容は、レコーダーとメモで記録した。

気仙沼市の冒険遊び場の位置付けを知るために、気仙沼市議会議員・今川悟と気仙沼市子ども家庭課係長・菅原千枝子に話を伺った。時間は１人 30 分前後、場所は気仙沼市で、内容はレコーダーとメモで記録した。

第２節　調査地

本調査では、気仙沼市で活動する「あそびーばー」と「面瀬川ふれあい農園」の２カ所を調査対象とした。

調査地の選定基準は、まず東日本大震災後、東北の被災地で冒険遊び場のパイロット事業として作られた「あそびーばー」を選定した。そして第１段階で神林俊一に助言を受け、同じ市政のもとで展開する冒険遊び場が比較対象にふさわしいと判断した。そのため本調査では「気仙沼市内にある」「常設の遊び場」、この２つの条件を満たす「面瀬川ふれあい農園」を選定した。

表２は、気仙沼市における冒険遊び場の概要をまとめた表である。表は 2018 年７月時点に、冒険遊び場づくりの関係団体のホームページをもとに筆者が作成した。表は、遊び場名と表作成時点での存続有無、活動期間を表記する。調査時に存続していた箇所は「○」、確認できなかった箇所は「△」、閉鎖した箇所は「×」と存続欄に表記している。なお活動していた１

「あそびーばー」、２「面瀬川ふれあい農園」、６「鹿折遊び場」の３カ所のうちで、「鹿折遊び場」は常設ではない。

表２　気仙沼市における冒険遊び場の概要

	遊び場名	存続	活動期間
1	あそびーばー	○	2011年～現在
2	面瀬川ふれあい農園	○	2015年～現在
3	あそぼーかー	△	2011年～不明
4	馬籠小学校	×	2011年
5	くりの木ひろば	×	2012年～2015年
6	鹿折遊び場	○	2015年～現在

第３節　仮説

本章２節表１で４「馬籠小学校」、５「くりの木ひろば」が活動を終了していることを確認した。「馬籠小学校」は小学校の校長先生が変わったこと、震災直後の厳しい時期から落ち着いたことが収束した理由である。「くりの木ひろば」はサポートしていた団体の資金不足と協力していた地域住民が防潮堤などの町の復興に向けた議論に時間を割くようになり、子どものことまで手が回らなく、収束した。

また、第１段階で根本暁生と須永力は遊び場の発展には地域住民が主体となり、地域でサポートする体制が不可欠であると述べる。根本暁生は宮城県岩沼市の例を挙げ、運営形態の変容も遊び場を存続させる一要因であると述べる。須永力は震災前から子ども支援の必要性や啓発をしてきた人の存在と、遠藤みゆは震災後に子どもの遊び環境に危機感を抱いた人の存在が遊び場づくりのキーパーソンになると述べる。

第１段階の調査結果から遊び場づくりの事業が一過性のものとして終わらせないためには、地域の自治が重要である。震災後外部から遊び場づくりに入った機関の支援を受けながらも、完全に頼ることなく、地域に根差した遊び場を作る意思がある地域は、外部組織が支援を終えた後も、遊び場づくりの事業が継続されやすい。また被災地では復旧復興が進むにつれ、子どもの遊び場への関心が寄せられなくなる。そこで子どもの視点で地域に発信する人の存在が遊び場を発展させやすい。

そのため、活動費用や活動場所の確保の他に、子どもの遊びに対する感度の高い人が地域内

にいること、地域のニーズに沿うよう運営形態を柔軟に変容させられること、地域内で遊び場づくりの理解者と支援者を得られること、この３つの条件が被災地における冒険遊び場の長期的な活動を可能にすると仮説を立てる。

第３章　調査結果

本章では第１節に「あそびーばー」、第２節に「面瀬川ふれあい農園」の調査結果をまとめる。いずれも、（１）基本属性、（２）運営形態、（３）遊び場の役割の順で論を進める。第３節で考察を述べる。

第１節　「あそびーばー」

（１）基本属性

「あそびーばー」の概要は表３に示す。「あそびーばー」は気仙沼市大谷地区に位置する。開園中は、常駐のプレーリーダーが１名配置されており、閉園中でも自主的な利用に差し支えない。遊び場の設備は調査時には表３のようであったが、設備は基本的に永続性がなく、利用者が自由に作りかえることができる。遊び場開催中は遊び場の入り口付近にあるの民家の水道を借用している。写真１から写真３は「あそびーばー」の写真である。

表３　あそびーばーの概要

調査対象	あそびーばー	
団体	気仙沼あそびーばーの会	
頻度	週5日	
経緯	2011年4月	東日本大震災後、づくり協会が「遊び場を通した子どもの心のケア！」を目的に開設
	2011 年12月	「遊び場を集う親の会」発足
	2012年9月	遊び場の運営を地元の自治組織「寺谷振興会」に引き継ぎ、づくり協会は神林俊一を常駐のプレーリーダーとして派遣する
	2013年4月	運営を地域住民による「気仙沼あそびーばーの会」に完全に引き継ぎ、づくり協会は撤退する
運営費	年間約300万円(2017年)	
所在地	宮城県気仙沼市本吉町寺谷	
土地	私有地	
面積	約1.500㎡	
設備	ビニールハウス、ウサギ小屋、ターザンロープ、小屋、ブランコ、東屋、リーダーハウス、トイレ、廃材置き場、倉庫、水道、ログハウス、ペット(犬一匹、ネコ一匹、馬一頭)など	

写真１　あそびーばー

（出典：筆者撮影）

写真２　あそびーばー

（出典：筆者撮影）

写真３　あそびーばー

（出典：筆者撮影）

(２)運営形態

「あそびーばー」は 2011 年の設立から 2018 年までに運営主体が１度変化していた。2011 年４月から 2013 年４月まではづくり協会が事業の主体となって運営し、2013 年４月に住民団体「気仙沼あそびーばーの会」に完全に引継ぎ、以降地域住民が運営している。なお、①はづくり協会が運営主体となっていた頃について、②では 2013 年以降の地域住民が引き継いだ後について述べる。

①づくり協会

「あそびーばー」は 2011 年４月に被災地の緊急期の子どもの心のケアを目的にづくり協会によって設立された。当時は、シャンティ国際ボランティア会と協働体制で、づくり協会が事務所として、全国の遊び場関係者に呼びかけた。寄付体制を整え、資金援助を行い、同年８月末まで全国のプレーリーダーを交代で常駐させて「あそびーばー」を直営していた。

阪神淡路大震災での遊び場づくりの経験から、づくり協会は「地元の子どもたちに長く残すためには地域活動として運営される必要がある」と考え、３ヵ月を目処にハンドオーバーを前提に「あそびーばー」を開始した。３ヵ月という期間も、阪神淡路大震災で３ヵ月の遊び場を開催すれば子どもの心のケアに一定限果たせると確信していたからである。しかし、現地の状況から順次期間を延長し、同年９月からは、常駐プレーリーダーを１人派遣し遊び場の安定的な運営を図った。この時期に常駐プレーリーダーとして残ったのが神林俊一である。

そして、同年 12 月に「遊び場を集う親の会」が発足。地元で運営するための模索が始まったが、人間関係の悪化を理由に活動は２カ月で停滞した。

その後「遊び場を集う親の会」からメンバーが抜けたものの、2012 年９月に地元の自治組織「寺谷振興会」に運営を移管した。しかし、寺谷振興会による活動も数カ月で終了する。理由は、気仙沼市の各地から来園者が来る「あそびーばー」を寺谷振興会の会費で運営していたこと、地区の自治会が主体者になることによって、遊び場に地域色が反映され、地区外の来園者が来づらくなっていたからである。神林俊一は「子どもの遊び場だけは誰でも来られるように風通しが良い状態を保たなければならない」と考え、自治会の中からメンバーを募り、「気仙沼あそびーばーの会」を発足させた。2013 年４月にづくり協会から正式に「気仙沼あそびーばーの会」に事業が引き継がれ、鈴木美和子が会の代表を務めた。鈴木美和子は、遊び場の担い手になった経緯を以下のように説明する。

> 日本冒険遊び場づくり協会の方々が、永遠に遊び場を継続してやってくれると思っていた。…そしたら、私たちはサポートする立場で、自分たちがここをオープンしてここを運営していく立場ではないんだ、と教えられて。そしたらこの子どもたちどうするの、やっと元気を取り戻して、楽しく遊んでいるのに、公園だって流されたし、校庭には仮設住宅が所狭しと並んでいたし、こんな状態でどうするのと。この状態今終わらせるわけにはいかない思いはあって…結局は、若いお母さん方が手を挙げてくれるまで、私がピンチヒッターとして始まったことです。

づくり協会が撤退した後も、神林俊一は遊び場に残り、遊び場を運営する具体的な作業を住民に引継ぎながら、地元のプレーリーダーの雇用を目指した。そこで、雇用されたのが、千葉開生である。そして 2014 年度をもって神林俊一も「あそびーばー」の支援を終える。

②気仙沼あそびーばーの会

「気仙沼あそびーばーの会」に引き継がれた後も、「あそびーばー」は「自分の責任で自由に遊ぶ」の基本原理のもと、鈴木美和子、千葉開生とアルバイトの女性の３名で遊び場を運営している。活動期間が長期化するにしたがって、地域のニーズは刻々と変化し、「あそびーばー」の運営もその時々の状況に合わせてスタイルを変化させた。

最初に浮上した新たなニーズが、高齢者の居場所づくりであった。子どもたちの心身の負担回復を目的に開設した遊び場も、次第に地域の高齢者が集う場になり、鈴木美和子先導のも

と高齢者向けの「匠なすびの会」が発足した。「匠なすびの会」は「あそびーばー」内のビニールハウスを利用して、手工芸品の製作活動を行っている。そして「あそびーばー」の運営経費の捻出に役立てたいと、会が志願して、作品を道の駅に収めている。

次に子どものセーフティネットとしての役割を果たすようになった。復旧復興期に突入すると、3 食塩おにぎりを食べている家族、夜 11 時まで両親が返ってこない兄弟、インフルエンザになっても病院に行けない子どもなど、子どもの貧困状態や家庭情況が浮き彫りになった。「あそびーばー」は日中に開く「未来食堂」と夜間帯に開く「星空食堂」という名の子ども食堂を始め、来園する子どもたちに無料で食事を提供する。

遊び場内にあるリーダーハウスを開放して社会福祉協議会や民生委員、サポートを必要とする家庭が定期的に集い、子どもや保護者への適切な保護や支援の場となった。さらに、独自のプレーカー活動「出前あそびーばー」を開始させ、町会や商店街と協力し、地域イベントに出向いては子どもの遊び環境を保障している。

現在も上記の内容に加え、大谷小学校の「あそびーばーで遊ぼう」というプログラムや震災後から「あそびーばー」を支援している青森県三沢基地の米軍による遊びを活用した英語教育などの多様なコンテンツを含む活動を行っている。

鈴木美和子は、長期に渡って「あそびーばー」を運営できた理由を以下のように綴る。

> 課題がその都度変わって来るじゃない、その課題に対応しなくちゃならない、その思いがあったから継続できたのかもしれない。…それになんとかうまく合わせながら、自分を。だから今年はこれをやろうってことはないけど、必然的に色んな課題が見えてきて、それに対応しているうちにこんな年数が経った。

づくり協会が運営主体となっていた頃は、づくり協会が資金をバックアップしていたが、地元団体に引き継いだ後は、「気仙沼あそびーばーの会」が運営資金を捻出し、その中で活動とプレーリーダーの雇用費用を賄わなければならない。「あそびーばー」の 2017 年の運営費は年間で約 300 万円であり、その大半がプレーリーダーの給与となっている。現在は宮城県の「みやぎ地域復興支援助成金」と気仙沼市から高齢者支援の助成金、子どもの居場所支援名義で日本赤十字社赤い羽根からの助成金、「匠なすびの会」の手工芸品による収入、寄付金、会費から活動費を調達している。しかし宮城県からの助成金は 2019 年で終焉する。資金源の枯渇は、遊び場の規模の縮小や活動を休止せざるを得ないため、今後の活動資金の確保が課題となっている。また、来園者が子どもと高齢者と二分化しており、いかに親世代を巻き込み

世代交代を図れるかも課題である。

（３）遊び場の役割

利用者への調査から「あそびーばー」には多世代交流の場、親同士の交流の場となっていることがわかった。以下でそれぞれの役割を示すヒアリング内容をまとめる。

遊び場は幅広い世代の人を集い、多世代との交流の場となっていた。

「子どもたち成長したと思いますよ。ここさ来て、みんなの遊び見て、自分でやって、みんなみて」「ここは年関係なく、上の子が引っ張ってくれるけど、公園に行っても、同じ学年でまとまってて」「ここ以外で、保育園では遊ぶけど、大きい子と遊ぶのはここだけかな。」「子どもの声ってすごくいいの。孫も大きくなって、子どもと接する時間ってないもん。だから遊び場に来るとすごく楽しい。」「子どもたち遊び見てるのが楽しい。この前、おらゲーム教えてもらって、面白れぇね」

遊び場の理念を理解した親同士が集まる場ならではの気楽さも見られた。

「美和子さんに会いたくてきた」「大人が入ると大人の感情が、あの子は悪い子だから、親がでるとレッテルが貼られちゃう」「お母さん達って人を叩いたりするのって、やっぱりダメなわけで、人の子は怒れないから自分の子をすごい怒って、いたたまれない。」「（あそびーばー以外は）子どもじゃなくて、親に気を使って遊ぶ、初めて会うから本音もわからないし。」

第２節　「面瀬川ふれあい農園」

（１）基本属性

「面瀬川ふれあい農園」の概要は表４に示す。「面瀬川ふれあい農園」は気仙沼市面瀬地区に位置し、休耕田を利用した遊び場である。周辺には小学校、中学校、集団移転の災害公営住宅がある。「面瀬川ふれあい農園」は 2015 年９月に開園し、住民団体が運営主体となっている。遊び場の面積は約 2400 平方メートル、無料で一般開放、常駐のプレーリーダーはいない。小さな川を渡った先に遊び場があり、大人の不在時は川の利用が禁止されている。遊び場の設備は調査時には表３のようであった。トイレは遊び場の正面に建つ福祉施設「キングス・ガーデン宮城」のトイレをお借りしている。写真４から写真６は「面瀬川ふれあい農園」の写真である。

表４　面瀬川ふれあい農園の概要

調査対象	面瀬川ふれあい農園	
団体	面瀬川ふれあい農園運営委員会	
頻度	不定期	
経緯	2015年4月	「面瀬川ふれあい農園運営委員会」発足
	2015年9月	震災後のコミュニティの再生のため、多世代交流を目的に開設
運営費	年間約30万円(2017年)	
所在地	宮城県気仙沼市松崎大萱	
土地	私有地	
面積	約2.400㎡	
設備	ビニールハウス、ブランコ、藤だな、U字工、釜、トイレ、廃材置き場、倉庫、畑	

写真４　面瀬川ふれあい農園

（出典：筆者撮影）

写真５　面瀬川ふれあい農園

(出典：筆者撮影)

写真６　面瀬川ふれあい農園

（出典：筆者撮影）

（２）運営形態

「面瀬川ふれあい農園」は、2015 年に震災後のコミュニティの再生に向けて作られた遊び場である。

震災後、遊び場付近に位置する気仙沼面瀬小学校の６年生にヒアリングをした結果、「面瀬には遊べるところがすくない」「公園は遠いのに何もないイメージ」などの意見が聞かれ、子どもの育ちに必要な遊びの空間が不足している実態が明らかになった。同学区内にある面瀬中学校も校庭には仮設住宅が立ち並び、中学生は小学校の校庭で部活動を実施していた。震災後に子どもの遊び場を担っていた校庭が使えず、子どもが安心できる居場所が制限されていた。また、2016 年中に約 180 世代が面瀬地区内の防災集団移転団地への入居が予定されており、新しく移転してきた住民と地元住民を繋ぐ場所が求められていた。そこで「老若男女が集える場所を」と住民主導で整備する遊び場の構想が持ち上がったのである。

2015 年４月、「面瀬川ふれあい農園運営委員会」を発足した。「面瀬川ふれあい農園運営委員会」は事業を展開していくにあたっての方向性を見出し、提案事項を吟味することを中心に、年に１回総会を開いている。運営委員会の役員は運営委員長１名、副運営委員長１名、幹事５名、事務局長・会計１名、事務局補佐１名、顧問２名、アドバイザー２名、サポーター１名の計 14 名で構成されている。構成員には面瀬地区のまちづくり協議会会長や公民館長、市議会議員、社会福祉法人キングス・ガーデン宮城、神林俊一、遠藤みゆ、面瀬地区でボランティア活動を行っていた中央大学の学生などが含まれている。

運営委員会は、会員以外に、面瀬まちづくり協議会、社会福祉省人キングス・ガーデン宮城、面瀬小学校 PTA、面瀬小学校、地域住民、一般社団法人プレーワーズ、中央大学との協力体制を築いた。

委員会の役員決めについて、神林俊一と市議会議員で面瀬川ふれあい農園の事務局補佐を務める今川悟は以下のように語る。

> 力関係が生じないように配慮した。公民館長はふれあい農園の活動を公民館の活動にしようとしていた。でもあそこは地区の遊び場で住民が主体。変な力がかからないように、公民館長はアドバイザーとして主要役職から外した。

> 役員決めは大体お願いして決めている。人選は、大体地区でそういう雰囲気があるんだよね、この人がトップで、２番手みたいな。地区のこと知っていれば、役員は決められます。

「面瀬川ふれあい農園」は「あそびーばー」を参考に遊具を作り、「自分の責任で自由に遊ぶ」をモットーに掲げ、プレベントと地域への説明会を重ね、2015 年９月に正式に開園する。

「面瀬川ふれあい農園」は、面瀬地区のコミュニティを優先し、基本的には地区外に発信していない。運営委員会を発足しているが、地域住民が主体となってイベントを立ち上げている。現在は地域住民の以外に、気仙沼内にある子育てサークル「けせんぬま森のおさんぽ会」、面瀬小学校が総合的な学習の時間の一環として地域学習を行っている。また中央大学ボランティア団体の活動の場ともなっている。

活動資金は、気仙沼市の復興まちづくり協議会運営費補助金と日本赤十字社の赤い羽根災害住民支え合い活動助成補助金、寄付金などで、年間約 30 万円である。

面瀬川ふれあい農園運営委員長・佐藤正儀は「子どもたちは地域の宝。遊びを経験する場所がほしかった。保護者や高齢者も使えるようにすることで、地域で子どもたちを見守る体制づくり、コミュニティの構築につなげたい」（「住民で遊び場作り」『三陸新報』2016 年５月 22 日２頁）と面瀬川ふれあい農園への想いを綴る。

（３）遊び場の役割

利用者へのヒアリング調査から、「面瀬川ふれあい農園」には以下のような役割が見られた。

遊び場は高齢者の生きがい、居場所づくりに寄与していた。

「農園に集まって、良いね。家で１人でいるよりは。外に出る機会になったね」「ここができてから、楽しみが増えたね。こうやってみんなで協力しねければなって思って。世話をしなくてねーなと思って。今まで、私なんかは職場の人間と遊び仲間の友だちとしか付き合いがないから、意外とね全然無関係の人と繋がるって少ないんだよね。ここでね、お話できるから」

遊び場は防災集団移転団地へ移転してきた人々の居場所を形成していた。

「私ら震災後からこっちに来たから、ここでみんなと集まって」「被災者なの津波の、ここに来て新しい顔なのさ、だから混じって慣れていかないとと思って、よく混じってるのよ」

木工作や畑作りを通じた地元文化の伝承・多世代交流の場としての役割を担っていた。

「子どもたちが自分で考えて遊べる場所。川で遊ぶとか、畑とか、結局昔の遊びなんだよね、昔はおもちゃもなにもないし、道具もないから自分達で考えて遊んでいた。それを今そこで実践している」「前にイワナ掴みのイベントで、川にネットをかけて。それを見てたんだね。子どもたちがかけて遊ぶようになって」「あの人なんかは、山形大学の農大でてるんだっけ。ここさきて一生懸命世話をしてるんだけど、やっぱり色んなこと教わるもんね。」「大人が遊べるし、大学生がくると、色んな考え見れるし、知れるし、いいこといっぱいだね」

遊び場での子どもとの関わりから、子どもの貧困状態や家庭情況が浮き彫りになり、子どもへの適切な保護や支援の場にもなっている。

学校でいじめにあっていた 6 年生の子がね、そこに来てたまたま自分が 6 年生で一番上だったの。ちっちゃい子ども達が火をおこすって、今日一番上あんたしかいないから、子ども達に火おこし教えてやって、いいよって。やらせるとなんでもできるんだけどね、でも引っ込み思案で、自分からやりますってことはなかったんだけど。それから徐々に声も出るようになって、あの子は本当にあそこで成長したなと思ってね。早くこっちに来てやれって言うと、おーこの子声出すんだと思ってね。優しく教えてたもんだから、小さい子もすぐに覚えて懐いてきたし。学年が違うから、その子がいじめられているとか分かんないでしょ、ちっちゃい子は、同級生もいないから、その子ものびのびと出来たんだろうね。これ学校でいじめられて小さくなっているってわかっている子がいれば、できなかったんじゃないかな。その子の中で自信もできたしね。

お菓子の袋、大きいの一人で抱えて食べてる子がいて、何でそれ食べてるって聞くと、俺の朝ご飯だっていうの。何で朝ご飯食べて来ないのって聞くと、だってかあちゃん作ってくれないもん、作ってじゃなくて、もう 6 年生になるんだから、一人でやって食べてこいって、なんにもねぇんだぞって。なんだ、そうか、待ってろ、今おいしいの作ってやっから。そういう家庭の子もいた。

おうちの育児放棄で、その子も最初はやっぱり格好つけて嘘が多かったのね、でもだんだんそこに来るうちに素直になって。…やっぱり初めのうちは格好をつけて、6 年生だし。でもだんだん素直になって、格好つけも何も忘れてしまって。そういう子の受け入れる場所にもなっているなって思ったね。

遊び場で築いた人間関係はまちづくりにも貢献していた。

「周りの大人も子ども達と顔見知りになったから、声もかけやすいし。」「やることによってあそこの地域が仲良くなれたし、子ども達の遊び場が出来たし、学校とも地域の人達が親しくなれたし、公民館の人とも関わりを持つから親しくなれたし、あといろんな支援で来てくれる人達もできたし。」

面瀬小学校では、遊び場の地理的要因を利用して、総合的な学習の時間の一環に面瀬川ふれあい農園での活動を組み込み、地域学習を行っている。

「小学生が畑体験したり、川で遊んだり、体験する。今までも農作業や川遊びができる場所は

あったけど、沢山できるわけではない。」

第３節　考察

本研究では、被災地域の冒険遊び場の存続理由を明らかにすることを目的としており、運営形態と利用者へのヒアリング調査を中心に考察してきた。

震災後、づくり協会が支援者として被災地に入り、冒険遊び場の名前も概念も浸透していない東北に冒険遊び場を持ち込んだ。そして、活動は遊び場づくりに賛同した地元住民に引き継がれ、住民同士が新たに芽生えた問題意識の解決に向けて活動している。

調査の結果から、この２カ所の冒険遊び場には「自分の責任で自由に遊ぶ」モットーを軸に活動が派生していることがわかった。自由に遊べる冒険遊び場であるからこそ、利用者を引き寄せられている。調査から両遊び場では幅広い世代が遊びを通じて縦社会を形成し世代間の交流を促進していること、子どもの健全育成の場として重要な役割を担っていること、遊び場を媒介として地域活動の活性化が図られていること、地域で子育てをする機運が高まるなどの意義を伴っている様子が見られた。これらは何れも、「地域の居場所」づくりに貢献していると考えられる。

気仙沼市は冒険遊び場づくりを住民運動では、「あそびーばー」と「面瀬川ふれあい農園」は如何にして遊び場を持続させているのだろうか。その要因の３つある。１つ目は運営主体者の着眼点が、「子どもが遊べない」と思わず「子どもが育つ環境こそ問題」と考えられたことである。子どもの遊びを表わす三大形容詞として「危ない」「汚い」「うるさい」がある。しかし、大人からすれば危険行為と見なす子どもの遊びを保障していこうとする感度があり、「地域の子どもを地域で育てる」という志向が遊び場を維持している。

２つ目は、冒険遊び場のモットーにこだわりながらも、活動内容を制限せず、地域のニーズに合致するように運営体制を柔軟に変化させていることである。「あそびーばー」は、震災後の子どもの心のケアを目的にスタートし、地域のニーズに合わせて、高齢者向けサークルや子どものセーフティネット、遊び場の啓発活動を取り入れた。そして、運営主体が自らの生活スタイルを変化させて活動を維持していた。「面瀬川ふれあい農園」は、震災後のコミュニティ再生に冒険遊び場を活用した例である。運営委員会の委員を遊び場関係者に限定せず、活動する上で必要となるステークホルダーとの関係性を予め強化していた。

３つ目は、遊び場づくりの最大の緩和帯となる地域住民の理解と協力を得られていることである。

（本文 11313 字）

終章

本調査は、卒業論文を執筆するに当たり、2018 年度文学部学外活動応援奨学金を申請して行いました。卒業論文では「被災地の冒険遊び場づくり運動―長期的な活動を可能とする要因―」を題目に５章構成で作成しました。調査結果は第２章から終章までの内容に反映されております。以下が論文の構成となります。

序章　研究目的と展開

第１章　冒険遊び場の誕生

第２章　日本での冒険遊び場の誕生と発展

第３章　被災地における冒険遊び場

第４章　調査概要

第５章　調査結果

終章　調査から見えた被災地の現状

最後に本調査を遂行するに当たり、ご指導を頂きました鳥光美緒子教授、副査としてご助言を賜りました古賀正義教授に感謝致します。また、調査を引き受けて下さった、特定非営利活動法人日本冒険遊び場づくり協会、特定非営利活動法人冒険あそび場せんだい・みやぎネットワーク、一般社団法人プレーワーカーズ、気仙沼市市議会議員・今川悟様、気仙沼市子ども家庭課係長・菅原千枝子様、気仙沼あそびーばーの会、面瀬川ふれあい農園運営委員会の皆様、中央大学文学部に厚く御礼を申し上げ、感謝の意を表します。